昭和50年度農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告

安濃村 辻の内遺跡
(付) 北端遺跡
松阪市 小野遺跡

1976・3
三重県教育委員会

目　　次

安芸郡安濃村辻の内遺跡 …… 1

(付)　〃　　北端遺跡 …… 19

松阪市小野遺跡 …… 25

例　　言

1．本書は昭和50年度に実施された農業基盤整備事業地域内の埋蔵文化財の発掘調査報告を増刷し、三重県教育委員会が編集したものである。

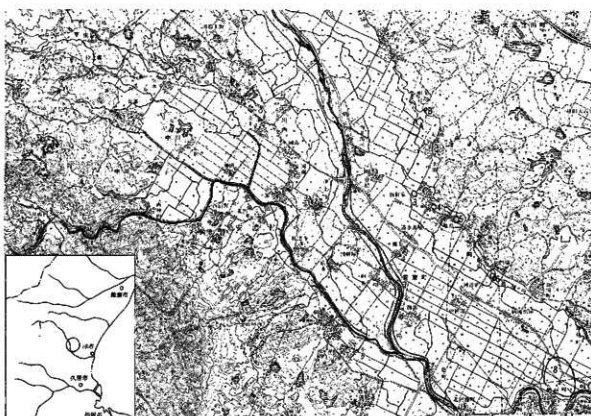
2．本書に載せた調査遺跡・調査主体・調査担当者・報告書作成者は次のとおりである。

遺跡名	調査主体	調査担当者	報告書作成
辻の内遺跡	安濃村遺跡調査会	伊藤克幸	同左
北端遺跡	三重県教育委員会	下村登良男	伊藤克幸
小野遺跡	松阪市遺跡調査会	吉村利男	同左

3.　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

昭和50年度農業基盤整備地域
埋蔵文化財調査報告　1

安芸郡安濃村・辻の内遺跡
—付—　北端遺跡



辻の内遺跡位置図（国土地理院1：25000津西部、縮本）

1975
安濃村遺跡調査会
安濃村教育委員会

I 前　　言

辻の内遺跡は、県営圃場整備事業安濃川左岸地区の対象地で昭和49年7月に芸濃中学校教諭浅生悦生氏の分布調査により発見された。安濃村大字太田のすぐ西北で南北100m、東西50mの範囲にあり、周囲の水田より30cm～50cm程高い畑地上に所在する。

県営圃場整備事業の実施に伴い当初計画では遺跡の大部分が削平される状況にあった為遺跡の取り扱かいについて昭和50年1月中旬に中勢教育事務所、津耕地事務所、土地改良区の協力で浅生悦生氏により試掘調査が実施された。調査は土器片の散布量を考えて試掘坑を15ヶ所設定した。結果は、表土下20cm～30cmで遺物包含層が認められ、その厚さは20cm～40cmであったが畑地の南側は不明確で土器の出土もなかった。

このことから、県農林水産部、津耕地事務所、安濃村教育委員会、中勢教育事務所、県教育委員会、土地改良区の間で協議が重ねられた。そして、畑地の南側は削平し水田化する、土器の出土量の多い北側は現状のまゝ残し、一部基幹排水路と農道については本調査するということになった。

本調査については、安濃村遺跡調査会（代表　安濃村教育委員会教育長浅生峯一）が県農林水産部より委託をうけて昭和50年10月上旬調査面積約250m²実施し10月下旬終了した。

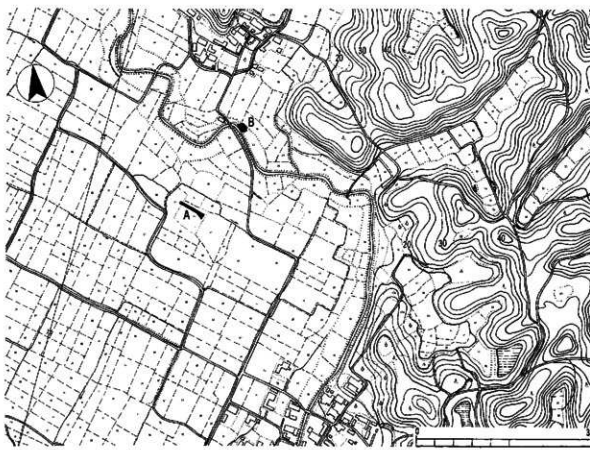
〈第1図〉　遺跡遠影（南西上空より）

調査担当として浅生悦生、下井彰（草生小学校教諭）両氏と伊藤克幸があたり、地元の太田および日余部落の人々のご協力を得、また、津耕地事務所、中勢教育事務所にはなにかとご配慮を頂いたことを記して謝意としたい。

Ⅱ 位　　置

鈴鹿山系に源を発し伊勢平野のほゞ中央部を流れる安濃川により形成された沖積平野の中流域左岸で、東に位置する見当山低位丘陵の西裾を流れる安濃川の支流美濃屋川の右岸すぐ近く標高16m程の微高地上に当遺跡がある。この微高地は周囲の水田から約40cmの高さで畑耕作されている。行政的には、安芸郡安濃村大字太田字辻の内に属する。

当遺跡となんらかのかかわりをもつと考えられる遺跡が多数所在する周辺部に目をやると、美濃川の流れに沿って、まず北東150mのごく近くに美濃屋川をはさんで北端遺跡(B)があり、同村清水の清水西遺跡(3)、津市河辺町の亀井遺跡(5)、桐山遺跡、森山遺跡(6)、同渋見町の竹川遺跡(7)と続いている。また安濃川が著しく蛇行する流域部の津市納所町には、県下最大規模をもつといわれる納所遺跡(8)、さらに西200mには菱老遺跡がある。安濃川の南を流れる岩田川を臨む半田丘陵上にも、東から半田高松遺跡、上村遺跡、柳谷遺跡、大ケ瀬遺跡、平栄遺跡、新畑遺跡などの遺跡が知られている。



〈第2図〉　遺跡地形図（1：6000）　A：辻の内遺跡　B：北端遺跡

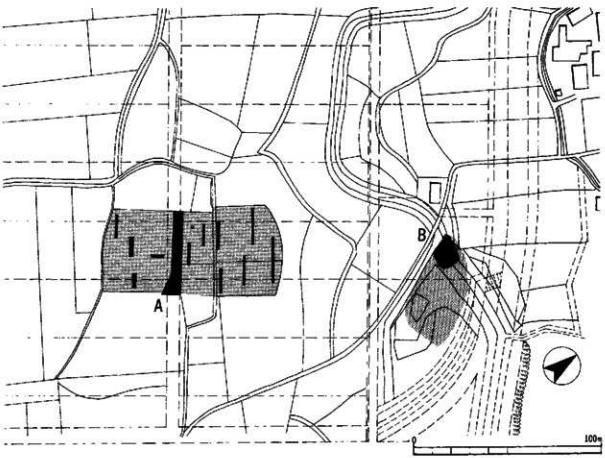
Ⅲ 遺　　構

検出できたものとして、竪穴住居址３、土坑１、屋外焼土２、溝址３、その他柱穴群である。断面層序は耕作土の下に遺物包含層として黄褐色粘質砂土層と暗茶褐色粘質土であるため判別しにくい。

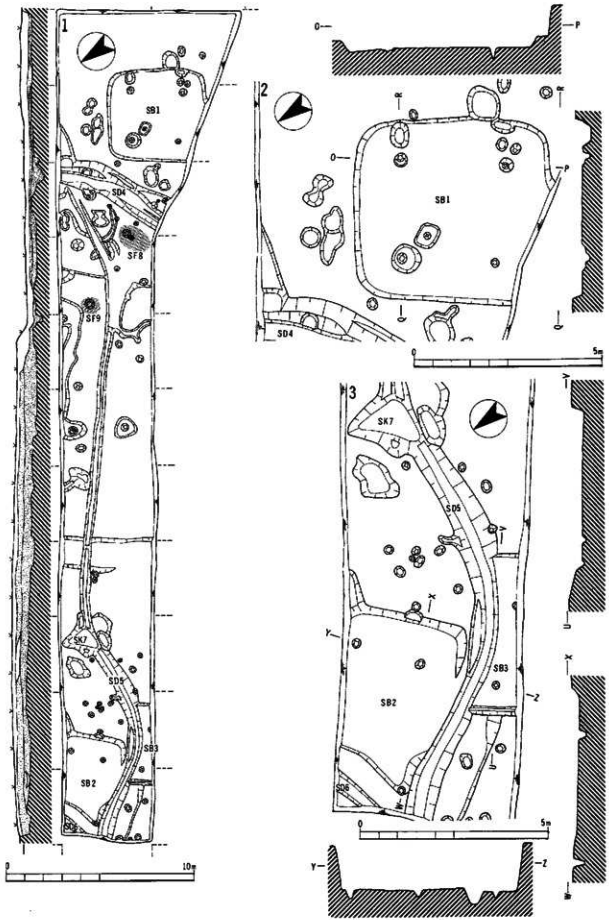
ＳＢ１　4.7m×５mのほゞ方形の竪穴住居址で柱間は約2.8mを測る。竪穴の深さは約20cmであるが周溝をもたない。南東壁から外へ径80cm床面よりの深さ20cmの大きな貯蔵穴と思われる穴が検出できた。弥生時代中期末から後期頃であろう。

ＳＢ２　１辺約4.8m、柱間1.8mの竪穴住居址と考えられるが南側はわりあいはっきりとのこるが北側はＳＤ６、西側はＳＤ５の溝により判別できない。弥生時代後期末から古墳前期頃であろう。

ＳＢ３　１辺4.3mは測れるが他辺は不明、北西壁には巾10cm床面からの深さ５cm程の周溝が検出されたが柱穴は不明。さらに、東側壁はＳＤ５により分断されているが一部分床面は残っていた。竪穴住居址の深さ30cmである。古墳時代後期頃であろう。



〈第３図〉発掘区平面図（１：2000）Ａ：辻の内遺跡、Ｂ：北端遺跡



〈第４図〉　１　発掘区実測図（１：200）　２，３　遺構実測図（１：100）

ＳＤ４　巾約1.5ｍ～２ｍ深さ約60cmで断面は長脚梯形を呈す。南から北にかけてやゝカーブしている。掘り方はしっかりとして排水路的な役割を果したもので古墳時代後期頃の溝であろう。

ＳＤ５　発掘区の北西端から蛇行しながらＳＤ４をこえて発掘区外に続く。北西端で巾80cm深さ50cmのしっかりとした長脚梯形を呈するがＳＫ７の南東からは巾約50cm深さ20cmの短脚梯形を呈し浅くなっている。この溝の中からは土器の出土をみない。底には周辺の水田の耕土と同質の灰褐色粘質土がつまっている。時期は不明である。

ＳＤ６　発掘区の北側端にあり巾40cm深さ15cmを測る。古墳後期頃の溝であろう。

ＳＫ７　径2.5ｍ×２ｍの不定形、深さは約50cmの土壙で弥生時代中期末から後期頃であろう。

ＳＦ８　40cm×20cmの小範囲に焼土、炭が検出された。この焼土の厚さは約５cmであった。古墳時代前期頃のものであろう。

ＳＦ９　ＳＦ８の北５ｍに認められたがこの焼土をはずしていくとすぐ下に柱穴が検出された。時期は不明。

Ⅳ　遺　　物

整理箱十数箱程度であり、定形品は殆んどない。縄文時代晩期後半、弥生時代前期末、中期末、後期前半、古墳時代前期初頭から後期の土器片のほか、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器の各破片それに石器類が出土した。特に弥生時代末期から古墳時代後期のものが多く須恵器類は少ない。弥生時代後期末に比定されるものもあるかと思われるがこゝでは古墳時代前期の土器の項で取り扱かった。

縄文時代晩期の土器

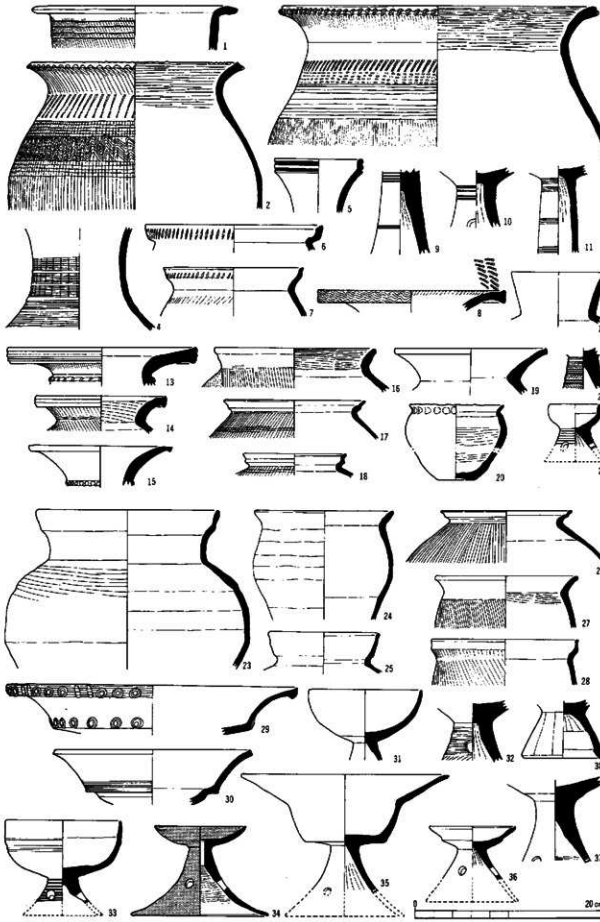
鉢形土器（67）深鉢型の土器破片の拓本であるが、口縁部はやゝ外反気味に肥厚し丸くおさめている。外側にはアナダラ属の貝殻腹縁を利用した押印刻文があり凸帯状をなす。粗製で胎土中に雲母を含む。これと同時期のもので口縁が外反し押引した凸帯をもつ破片も出土している。

弥生時代前期の土器

甕形土器（２、３）　２は口唇部上下端に櫛状工具による刺突を施し、全体を縦方向の刷毛目調整のあと、頸部から肩部にかけて櫛状工具による刺突文、横線文、波状文を密に施している。口縁部内側にも横方向の刷毛目がみられ、器壁は非常に薄手で赤褐色を呈す。３も全体の器形、施文等同じであるが口径が33cmと大型で厚手である。

壺形土器（４、５）　４は口縁部形状不明、頸部に簾状文、肩部に櫛描横線文を施す。５は口縁部に２条の凹線文を施している。

弥生時代後期の土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
0
20cm

〈第５図〉　遺物実測図（１：４）

甕形土器（6、7）　両方とも口縁部が直立する受口状を呈し、口縁部に篦状工具による刻み目がみられる。7は肩部に櫛状工具による刺突文を施す。

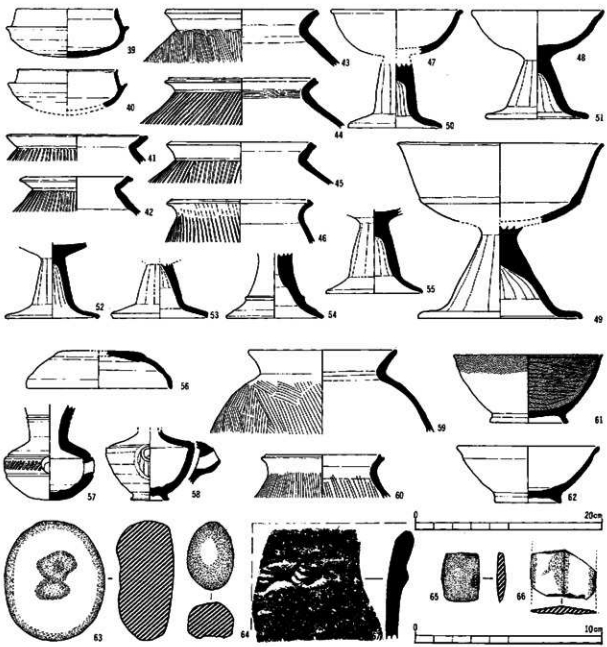
壺形土器（8）　口縁部が大きく外反しその端部が上下に肥厚する。口唇端部に波状文を、内側には刺突文を施す。

高杯形土器（9～11）　いずれも脚部のみであるが、筒状を呈し脚部付け根に数条の凹線を施す。

古墳時代前期の土器

〈土師器〉

甕形土器Ⅰ〔17、18、26、28、38〕　いずれもS字状に屈曲する短い複合口縁を有し、ほゞ縦



〈第6図〉　遺物実測図　39～64：（1：4）、65～67：（1：2）

方向の刷毛目が施される。17、18は肩部に横沈線を配している点で26よりは時期的に古いと思われる。

甕形土器Ⅱ（16、24、27）　口縁部がくの字状に外反するが、16は口縁内側に横方向の刷毛目を施す。24は内外とも刷毛目がなく粘土紐のあとがよくのこる灰褐色の焼成良好の土器。

壺形土器Ⅰ（12～15、19）　素縁の口縁部のものと装飾を施すものがあり、13～15のように頸部に凸帯をもちそれに装飾が施されているものは時期的に弥生時代後期末から古墳時代前期初頭に位置づけられるだろう。

壺形土器Ⅱ（23、25）　25は口縁部が内弯気味に開いていて頸部内側に凹線を有す。23は頸部が長く口縁部がわずかに稜を有しながら直立する。肩部に粗い刷毛目あとが残り器表は凹凸がある。二重口縁の壺形の退化したような形態であるが、全面に煤が付着している。

高杯形土器（21、22、29～33、34～37）　脚部に横線文と櫛描刺突文を施すもの（21、32）、脚部が三方透孔をもち横線文を施すもの（22、33）、杯部が半球形を呈するもの（31、32、33）、外反する口縁部に杯底部が球形状を呈するもの（30、35）、杯部に棒状浮文等の装飾を施すもの（29）などがある。33、35は全面に細かい篦研磨によるていねいな仕上げをしている。29、30は二重口縁壺形土器の類かもしれない。

器台形土器（34、36）　34は口縁が内弯気味に外へ開き底部は貫通している。仕上げもていねいで器面を研磨し全面丹塗りである。36は、杯内部に淡い黒斑が残る。稜を有し口縁が外反する。ていねいな研磨が施されている。

小型鉢型土器（20）　外反する短い口縁部は指などにより仕上げ、内部の胴には刷毛目を施す。胎土は粗で灰色を呈す。

古墳時代後期の土器

〈須恵器〉

杯身（39、40）　口縁部がや、内傾気味に立ち上がり青紫色を呈すもの（39）、口縁部がや、外反気味に立ち上がり端部に沈線がのこるもの（40）の２点であるが、底部はていねいな篦削りが施されている。

〈土師器〉

甕（41～46）　口縁部がくの字状に外反するいわゆるＳ字状口縁と呼ばれるもので胴部には粗く深い刷毛目が施されているもの（41、42、44、45）と口縁端部が内傾気味にわずかに立ち上がるもの（46）、細かい刷毛目を施すもの（43）があるが時期的には同じと思われる。

高杯（47～55）　脚部はや、ふくらみ気味の柱状を呈し面取り的に篦削りを施す。裾部は大きく外反する。49は大型のものであるが、杯部下方に凸帯状の稜を有する。54のように脚部中央やや下で凸帯状の稜線が走り裾部分はまっすぐ外に開くものもある。

奈良時代～平安時代の土器

〈須恵器〉

杯蓋（56）　口縁部は内弯し丸くおさえていて、頂部は篦切り未調整のまゝで厚い。

甕（57、58）　57は肩部と胴部に沈線を施しその間に櫛状工具による刺突文を配す。これより時期的には新しいと思われるものが58で、やゝ外へふんばり気味の高台がつき注口をもつ、肩部が角張っていて胴部から高台付け根までにていねいな篦削りを施す。

〈土師器〉

甕（59、60）　くの字状に外反する口縁部を有し刷毛目が施されている。

椀（61）　杯部全体が内弯していて口縁端部内側に一条の沈線を施す。ていねいなつくりの高台をつけている。内側は篦研磨が暗文状に施され、外側も研磨されている黒色土器である。

〈その他〉

山茶椀（62）　底部に糸切り痕を残し断面三角形の高台がつく、内外とも水挽きがていねいに施され、体部はあまりはらず口縁端部はやゝ外反する。

石　器

凹石（63）　12.6cm×10.6cm厚さ5.6cmの楕円形を呈する。２つの浅い凹みを有する。両面とも使用により擦り磨きがあり、硬砂岩系の石材であろう。

擦り石（64）　7.2cm×５cm厚さ４cmの卵形であるが片面は欠けている。砂岩系の石材であろう。

磨製石斧（65）　小型の扁平片刃石斧であり、片面はていねいに磨かれていて耳の一方は面取りがしてある。片面は剥離したそのまゝであるが刃先と中央部には磨きがある。緑色のあまりかたくない石材である。

石剣（66）　ほんの一部分であるが巾3.5cm厚さ0.4cmの薄手で、ていねいな擦り磨きがかけられ中央に穂を有す。断面は二等辺三角形状を呈す。ほゞ水平な面では剥離したそのまゝの状態であるが、端部に刃をつくるため擦り磨きがある。頁岩系の石材であろう。

V　結　　語

調査が排水路と農道の一部であった為遺跡全体の性格は完全につかめなかった。当遺跡は、美濃屋川右岸の微高地に縄文時代晩期頃から平安時代末頃まで断続的に営なまれた生活跡であり、このような立地条件をもった遺跡は弥生時代中期後半頃に比定される亀井遺跡[①]がある。当遺跡の推定範囲は位置図にあるが、調査により西側の水田下へも広がっていることはあきらかである。

以上、遺構、遺物などからみてこの辺の内遺跡は、安濃川の沖積平野に弥生後期以降の遺跡が著しく増加する現象[②]の一部でありながらも、また、断続的であったけれども、この現象のあらわれる以前すでに成立していたことがいえるのである。

〈註〉

① 谷本鋭次「津市河辺町・亀井遺跡」三重県教育委員会　1973。

② 下村登良男「養老、森山B、桐山遺跡発掘調査報告」三重県教育委員会　1972。

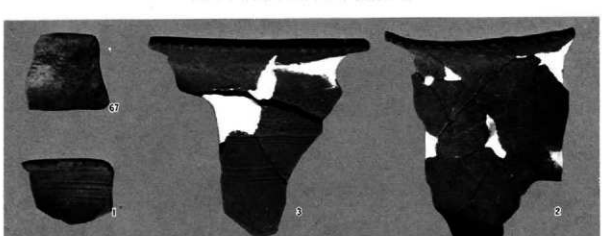
発掘区遠影（東より）

発掘区全影（北西より）

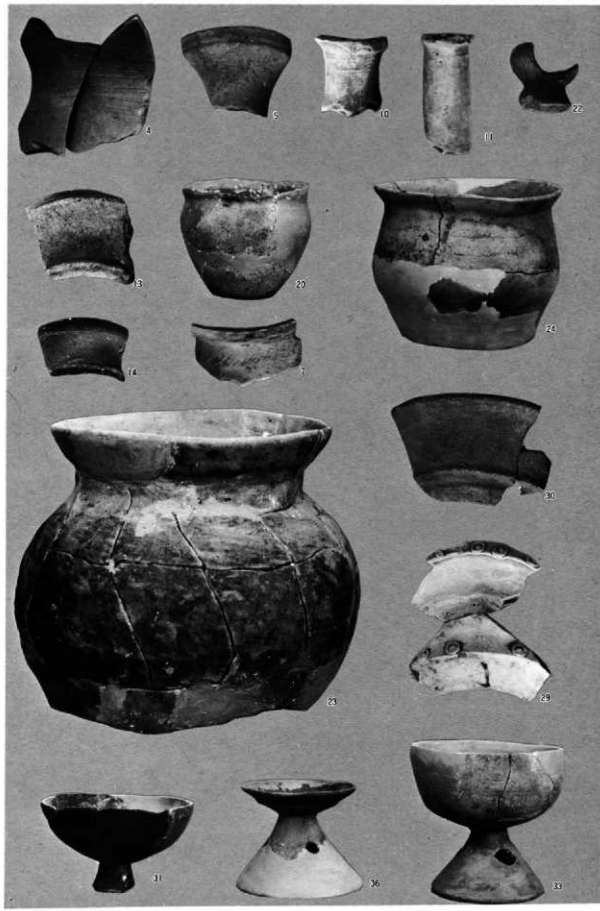
〈第７図〉　　ＳＢＩ（北西より）

ＳＤ４とＳＢ１（北西より）

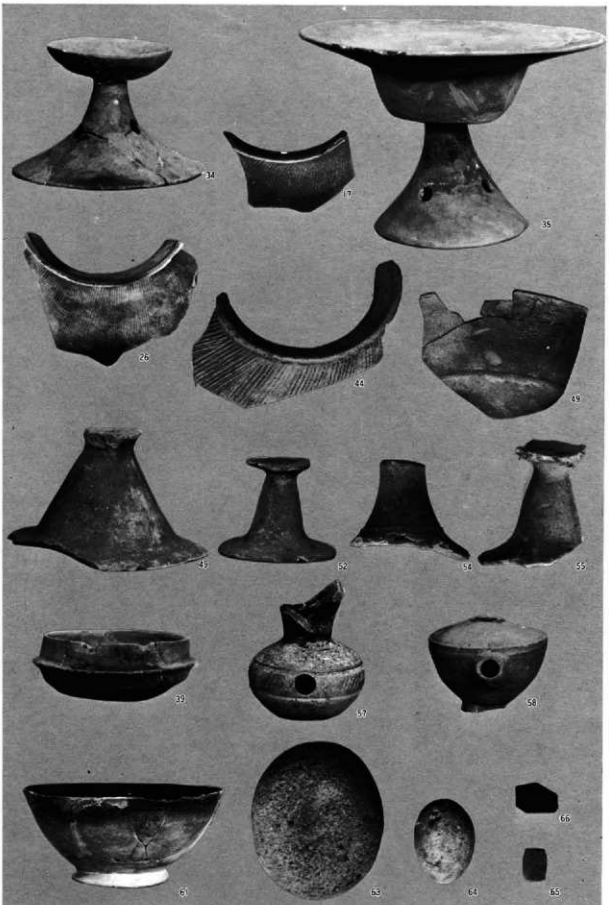
ＳＤ５、ＳＢ２およびＳＢ３（南東より）



〈第８図〉　出土遺物（１：３）



〈第9図〉　出土遺物（1：3）



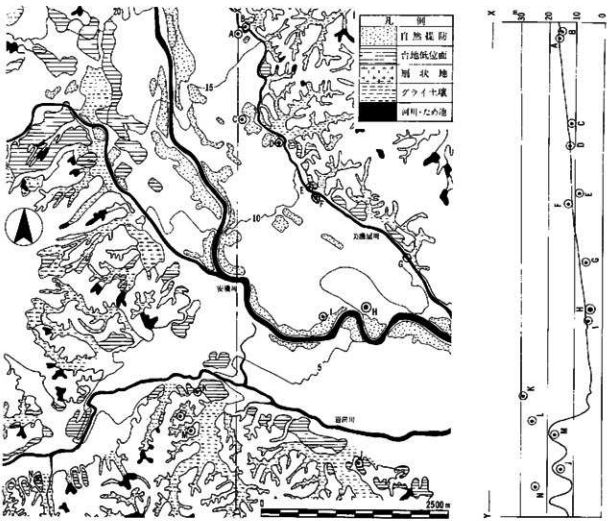
〈第10図〉　出土遺物（1：3）

Ⅶ 考　　察

現在、安濃川沖積平野に所在する弥生時代から古墳時代の遺跡で、殆んどが部分的ではあるが調査されたものは多い。

第10図および第１、２表をみてみると、縄文時代晩期の土器が出土しているのは、納所遺跡と辻の内遺跡だけである。縄文時代中期頃久居低位段丘を経て岩田川流域に入った文化が晩期頃から弥生時代前期頃納所遺跡に定着し、前期末頃美濃川中流域と半田丘陵の低位面に進出したのであろう。弥生時代前期頃は、丘陵低位面１、美濃川流域２、安濃川流域１であったのが、中期の後半頃になると丘陵低位面と安濃川流域は変化しないが、美濃屋川流域４と増加する。後期頃になると丘陵低位面４、美濃屋川流域５、安濃川流域２となり計で著しく増加する現象がよくわかる。丘陵高位面にあらわれる特色があり、10図でもわかるとおり平地遺跡と高地遺跡の二様相に分かれるのである。

弥生時代の集落が殆んどの場合沖積平野に立地する条件として、低湿地で水稲耕作の労働力が少なくてすむということが必要であり、特に還元土壌の性質をもつ青灰色のグライ土壌と密接な



〈第11図〉　安濃川流域平野の地形図（１：50000）
A～Ｎは遺跡　　（国土地理院「土地条件図」昭和49年３月版より）

遺跡記号	遺跡名	縄文時代	弥生時代						古墳時代		奈良時代	平安時代	調査面積(m)	検出遺構	立地		
			前期		中期		後期								標高(m)	状況	河川
		晩期	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半							
A	辻の内遺跡	○		○		○	○		○	○	○	○	250	竪穴住居址他	16	微高地下	美濃屋川
B	北 端 〃					○							120	竪穴住居址	〃	水田下	〃
C	清水西 〃									○			30	—	13	〃	〃
D	亀 井 〃					○							270	土 坑	12	微高地	〃
E	桐 山 〃							○	○	○		○	92		8	水田下	〃
F	森山B 〃			○				○	○				150	溝 址	11	独立低丘陵	〃
G	竹 川 〃					○	○	○	○					—	6	水田下	〃
H	納 所 〃	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	調査中	竪穴住居址他	3	〃	安濃川
I	養 老 〃						○	○	○	○	○		—	—	7	〃	〃
J	上 村 〃			○	○	○	○	○		○	○	○	450	溝 址	13～16	台 地	岩田川
K	柳 谷 〃						○						—	竪穴住居址	25～30	丘 陵	〃
L	大ヶ瀬 〃						○			○			—	竪穴住居址他	20～30	〃	〃
M	平 梁 〃						○						230	竪穴住居址	15～17	〃	〃
N	新 堀 〃								○	○			1100	竪穴住居址他	20～30	台 地	〃

〈第1表〉安濃川流域平野の遺跡（Hのほかは各報告書による）

遺跡番号	遺跡名	土壌統区名	利用形態	色層	湿光力	水稲根系発育の有無	自然肥沃度	養分の豊否	有効土層の深さ	表土下1mまでの土壌断面柱状より			
										有機土	グライ層	酸化物	褐色土黒褐土
A	辻の内遺跡	中の庄－3	田	灰 色	△	×	◎	○	◎	△	×	△	×
B	北 端 〃	波 瀬－2	〃	青灰色	◎	○	○	○	◎	△	○	○	×
		小口木－2	〃	灰褐色	△	×	○	○	○	○	△	△	×
C	清水西 〃	宮 古－2	〃	〃	△	×	◎	○	◎	△	×	○	×
		香 取 3	畑	黄褐色			◎	○	◎	△	×	×	×
D	亀 井 〃	中の庄－3	田	灰 色	△	×	◎	○	◎	△	×	△	×
E・F	桐 山 〃	宮 古－2	〃	灰褐色	△	×	◎	○	◎	△	×	○	×
	森山B 〃	上深谷－3	畑	黄褐色	—	—	○	○	◎	×	×	×	×
G	竹 川 〃	波 瀬－2	田	青灰色	◎	○	○	○	◎	△	○	○	×
		宮 古－2	〃	灰褐色	△	×	◎	○	◎	△	×	○	×
H・I	納 所 〃	小 木－2	〃	灰 色	△	×	○	○	◎	△	×	△	×
	養 老 〃	香 取－3	畑	黄褐色	—	—	◎	○	◎	△	×	×	×
J	上 村 〃	朝久田 1	田	灰 色	○	○	○	○	◎	△	○	○	×
K・L・M	柳 谷 〃	波 瀬 2	〃	青灰色	◎	○	○	○	◎	△	○	○	×
	大ヶ瀬 〃	朝久田 1	〃	灰 色	○	○	○	○	◎	△	○	○	×
	平 梁 〃	桜 －1	畑	〃	—	—	○	○	◎	△	×	△	×
N	新 堀 〃	朝久田－1	田	〃	○	○	○	○	◎	△	○	○	×
		香 取－3	畑	黄褐色	—		◎	○	◎	△	×	×	×
		堀 代 3	〃	〃		—	◎	○	◎	△	×	×	×

〈第2表〉遺跡周辺の土壌（三重県農業試験場の「水田および畑地土壌生産性分級図」昭和44年3月版より）

関係があることが報告されている。[16]

10図をみると、前述のグライ土壌は、半田丘陵、長谷山山麓および見当山低位丘陵の谷底平野に存在している。ただし、利用した土壌断面柱状が1mまでの成果表であるため表IIにはあらわれないが、現水田床面より深い位置に遺構が存在する納所遺跡にもグライ層の存在は十分に考え

られる。

しかし、このグライ土壌は2表でもわかるように還元力が強いため水稲の根系障害を起こす恐れがかなりあるため、初期的または労働力が不足する場合の生産基盤としては利点である反面、人口増加を吸収しその土地に継続的に発展するためには、利用が自然環境などにより限定されるこの種の低湿地では無理を生じることになるのあろう。

そこで、以下の方法が考えられる。まず、土壌改良等の技術導入により生産増加をはかる方法。これにしても、やはり分村という形で人口の分散がいつかは行なわれるであろう。

つぎに、栄養土の高い土壌を求めて移動する方法。これは、水稲耕作が中心となる場合やはり灌漑技術等の導入が前提であると考えられるから、畑耕作を中心として、附近の谷底平野で水稲耕作を併せて行なったと考えると必然性がでてくるのではないであろうか。

それに、増加する人口を分散する方法。これが、前述の二方法と比べてより妥当性があると考えられるが、移動する単位自体労働力が不足しているため、同じような条件をもつ土壌を求めることになるであろう。

安濃川流域において、弥生時代中期頃の遺跡が、10図にみれるとおり美濃屋川に開口する谷底平野にグライ土壌をもつ低湿地が存在しうることにより、美濃屋川流域の微高地、自然堤防に分村という形で展開したことが十分に考えられるであろう。一方では、納所、上村遺跡など、その後の土壌改良、灌漑などの耕作技術の導入、修得によりその地に継続発展していったのであろう。

弥生時代後期の安濃川流域での特色と、辻の内遺跡などのように断続する遺跡などを考える場合はどうであろう。弥生時代前・中期の遺跡が度々厚い堆積土の下から出てくることは、この安濃川流域の遺跡からもわかるが、このことより、弥生時代後期から古墳時代にかけて気温も低く、降水量が多かったことが予想されている。[7] 弥生時代後期の遺跡が著しく増加することは、洪水による冠水、帯水、埋没という災害のため、[8] 水利的に優位な位置に所在する遺跡をのぞいて、高位置に移動せざるを得なかったのであろう。継続的発展をしてきた集落でも幾多の災害により分村することにより生活を維持したのであろうし、ある時期断絶しまた展開する集落もその断点時には他所へ移動したのであろうことが考えられる。高位置に立地した小集落が丘陵低位面での畑作を中心に谷底平野での水稲耕作を併用すれば十分に生活し得たであろう。

1表により遺跡記号を使ってまとめてみると、その土地に継続する型（H）。気候条件などにより一時的に断絶し、また継続する型（A、J、F）。土地、気候などにより分村し、継続する型（C、E、G、I）。土地、気候条件などにより分村し、単時期で断絶する型（B、C、D、K、L、M、N）に区分できる。

さて、安濃川流域の遺跡から考えられることは、種々の要因により集落が継続、断絶、分散を

繰りかえしながら、土壌改良、灌漑などの技術の発達に伴い、低湿地より、生産性の高い土地である壌土、砂壌土地の存在する平野中上流部、すなわち、この時代以後にも発生した洪水による冠水、滞水、埋没などが下流部と比べて少なく安定した土地である長谷山山麓に広がる扇状地、台地低位面を含む安濃川右岸と見当山低位丘陵の裾部の低位面を含む美濃屋川流域に展開していったのであろう。このことは、この地帯に存在する多数の古墳群からも容易に考えられることであり、安濃川の沖積平野が古墳時代後期までに殆んど開拓されたということがいえるのではないだろうか。

（伊藤克幸）

〈註〉

① 県道雲林院津線バイパス工事に伴い、昭和48年10月から現在にいたるまで調査中の水田下に保存された弥生時代の一大集落址。三重県教育委員会文化課「納所遺跡概報」など。

② 当報告書

③ 三重大学歴史研究会原始古代史部会「堂山一号墳」安濃村教育委員会　1974第Ⅱ章

④ 下村登良男「養老・森山B、桐山遺跡発掘調査報告」三重県教育委員会　1972

⑤ ④の付篇、谷本鋭次、山田友好「竹川遺跡」三重県教育委員会　1972

⑥ 河出書房『日本の考古学』Ⅲ弥生時代第Ⅱ章の3

⑦ 河出書房『日本の考古学』Ⅴ古墳時代、下、第Ⅴ章の3

⑧ ⑥の第Ⅴ章の2

⑨ 河出書房『日本の考古学』Ⅶ歴史時代、下、第Ⅴ章の1

⑩ ③の第Ⅱ章

（付） 安芸郡安濃村・北端遺跡

Ⅰ 前言・位置

北端遺跡は、昭和49年２月県営圃場整備事業に伴う美濃屋川改修工事の仮排水路工事中に村会議員山下氏により発見された。津耕地事務所より報告を受けて早速現地確認をしたところ掘削された断面に文化層が認められた為、当遺跡の処置について協議の結果、仮排水路部分およそ 120㎡を調査することになった。

調査については、県教育委員会があたり、津耕地事務所、地元土地改良区のご協力を頂いて５日間程で終了した。記して謝意とする。

当遺跡は、辻の内遺跡の北東側約150ｍの美濃屋川右岸の標高約16ｍの河岸段丘上にあり現況は水田であった。発掘区の東側の畑地からは、かつて弥生時代中期頃の土器が出土していることがわかった。行政的には安芸郡安濃村大字太田字北端に属するが、現在は、美濃屋川改修および県営圃場整備事業により現況をとどめていない。

Ⅱ 遺　　構

竪穴住居址２が検出され、切り合い関係からＳＢ１の方が時期的にやゝ古く作られた。

ＳＢ１　７ｍ×６ｍの長方形に近い竪穴住居址、柱間は、南北2.5ｍ、東西４ｍで巾25cmのあまり深くない周溝がめぐる。南壁近くに深さ42cmの不定形ではあるが貯蔵穴と思われるものがある。弥生時代中期末頃のものであろう。

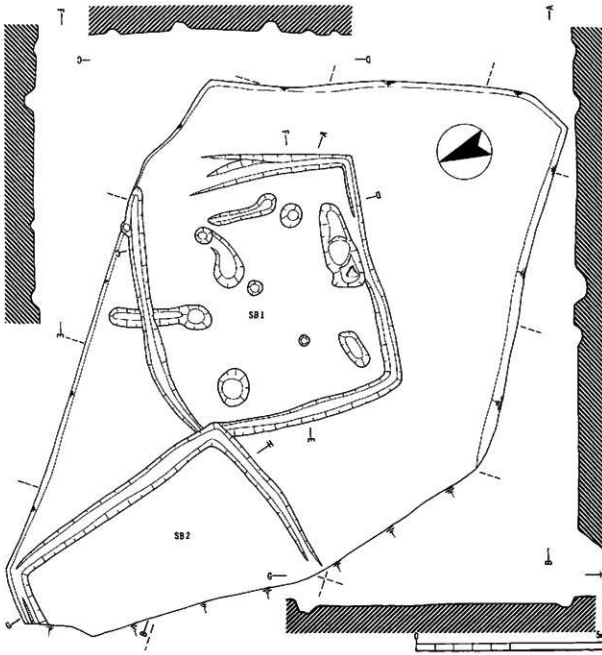
ＳＢ２　１辺７ｍで他辺は不明の竪穴住居址、巾40cm程の深くない周溝がめぐるが、所々で不明確になり、柱穴等内部遺構は不明。

Ⅲ 遺　　物

整理箱３箱程度の出土量であるが、いずれも弥生時代中期中頃から末頃に比定され一括資料としてよくまとまっている。他の遺物は出土していない。

弥生時代中期の土器

甕形土器Ⅰ（１、３、９）　頸部から外開きの口縁をもち口縁端部がやゝ受口状にたち上がるもので、口縁部外側は帯状に斜方向の櫛描文、櫛刺突文を施す。頸部下から胴部あたりに櫛描横

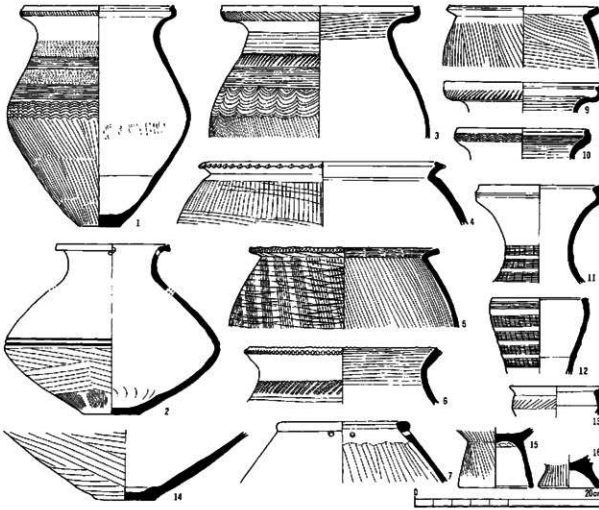


〈第12図〉　遺構実測図（1：100）

線文、刺突文、波状文を配し、胴部下から底部にかけてやゝ長めの刷毛目を施す。全体に胎土はやゝ粗いが薄手である。1はＳＢ２の周溝より出土。

甕形土器Ⅱ（6）　口唇部に篦状工具による細かい刺突を配し、口唇上端部にもみられる。口縁部は外反し内側に刷毛目を施す。甕形土器Ⅰより古そうである。辻の内遺跡出土のもの（2、3）と同型であろう。

甕形土器Ⅲ（5、8）　口縁部が強く外反する。5は口縁端部に櫛状工具による×印状の文様を配し、頸部にかけてしぼりあとがのこる。胴部に横方向の粗く雑な刷毛目のあとで縦方向の長い刷毛目を施す。



〈第13図〉　遺物実測図（1：4）

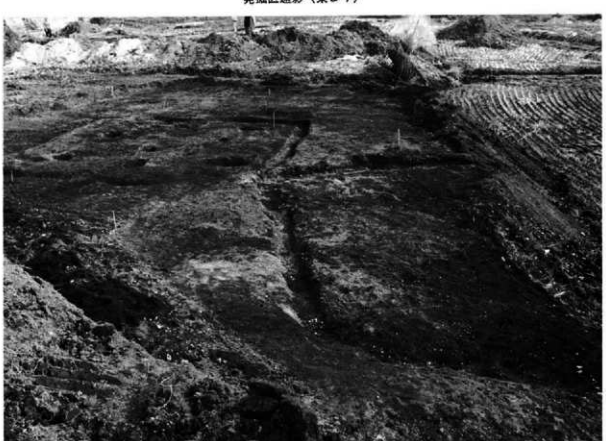
甕形土器Ⅳ（4）　口径が比較的大型でやゝ厚手である。口縁端部は上下に開き肥厚した状態を呈し、その部分に篦状工具による刺突を配す。胴部には縦方向と横方向の刷毛目が施されている。

壺形土器〈2、10、11、12〉　2は口縁端部が上下に開き凸帯状を呈し、2孔が対称している。胴が強く張り2条の凹線を施す。胴下部には篦磨き状の削りを底部近くは細かい刷毛目を施す。ＳＢ１より出土。10は受口状の口縁で外側波状文、内側は深くしっかりとした横線を施し胎土中雲母を含む。11は口縁部に2条の凹線がめぐり、頸部に簾状文を施す。12は内弯して口縁部になり、口縁部すぐ下より簾状文を数段施す。11より時期的にはやゝ古いものであろう。

無頸壺形土器（7）　口縁部全体が内傾し端部は折りかえしたように丸味をおび肥厚する。2孔一対の孔が対称位置にある。器表は磨耗がひどく文様の有無は不明、内側には斜方向の刷毛目がみられる粗い胎土の土器。

小型鉢形土器（13）　全体に黒色で、ていねいな横撫で調整がされ、胴上部に櫛描刺突文がみられる。下部は篦磨きされている。

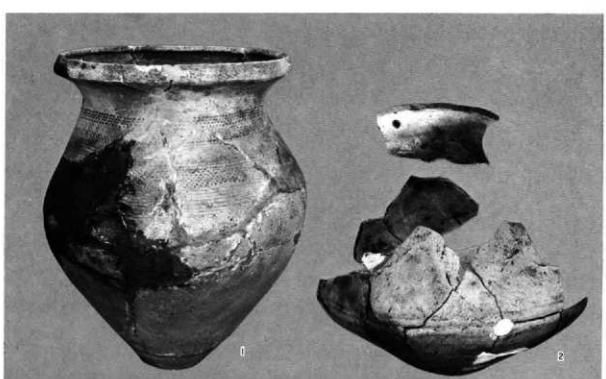
発掘区遠影（東より）



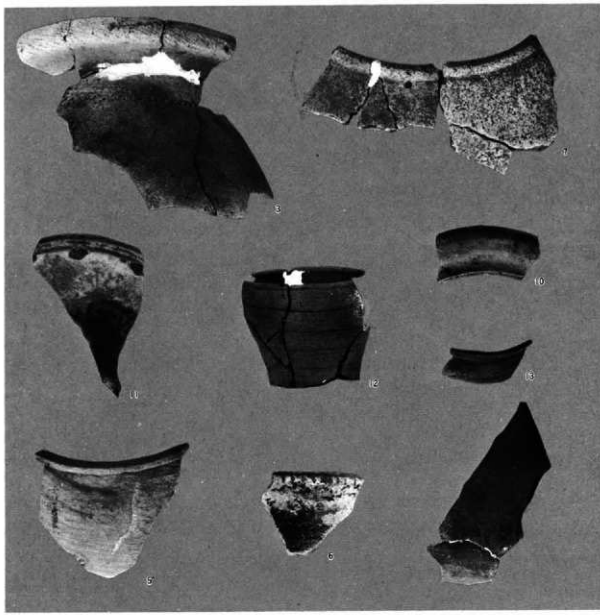
〈第14図〉　発掘区全影（北より）

ＳＢ１（北より）

ＳＢ２（東より）



〈第15図〉　出土遺物（１：３）



〈第16図〉　出土遺物（1：3）

Ⅳ　結　　語

調査は工事中発見に伴う短期間の緊急調査であった。時期としては、弥生時代中期後半に属する集落跡と思われるが、出土土器をみると弥生時代後期にうけつがれていくものもある。資料としてはよくまとまっていて竪穴住居址から出土していることも考えて貴重な遺跡である。

当遺跡と美濃屋川をはさんで所在する辻の内遺跡とは、ほゞ同じ標高上にあり、水田床面より下に遺構があるということもふまえて両集落は弥生時代中期後半頃密接なつながりを持っていたことが十分に考えられる。①

〈註〉

① 当遺跡の調査は下村登良男が、報文作成は伊藤克幸が担当した。

昭和50年度農業基盤整備地域
埋蔵文化財調査報告　2

松阪市・小野遺跡

小野遺跡位置図(国土地理院 1：25,000 大仰・松阪港)

1976・3
松阪市遺跡調査会

I 前　　言

農業生産の向上と機械化の進展に伴い、各地で圃場整備をはじめとする農業基盤整備事業が計画されている。それは広範囲でかつ大規模であることから事業地内に何ケ所かの遺跡が発見され、工事の施行にあたって文化財の保護が問題になることも少なくない。

小野遺跡もそのひとつで、農村基盤総合整備パイロット事業（中南勢）昭和50年度計画地内に所在したものである。

一志郡嬉野町境に近い松阪市小野町地内の台地南裾の畑地に、土器が散布していることが明らかになったのは、農業基盤整備事業施行着手直前のことであった。工事の計画はその土器の散布する畑地を削平し、水田・農道・用水路に改変することになっていた。

そこで、県農林水産部・松阪耕地事務所・県教育委員会等の間で協議が進められ、試掘調査が実施された。その結果、多量の土器が出土し、特に遺物の多かった区域を中心に本格的な発掘調査が実施されるはこびとなった。

調査は、松阪市遺跡調査会（代表　松阪市教育委員会教育長武内義弘）が、県農林水産部より委託をうけて、昭和50年11月～12月に実施した。

調査担当は県教育委員会文化課主事吉村利男が、事務担当は松阪市社会教育課があたり、現地の発掘作業には谷小太郎氏をはじめ、地元小野町の方々の協力を得た。また松阪耕地事務所・松阪市耕地課・土地改良区ならびに工事の施行にあたられた丸亀産業KK・山野建設KKにはなにかとご配慮をいただいたことを記して謝意としたい。

II 位　　置

雲出川及び三渡川の流域は伊勢平野のほゞ中央部にあり、南北に長くのびている伊勢平野が向きをかえ、東西方向に広がるちょうど要にあたる地域に当遺跡は所在する。「白米城」で有名な阿坂城(16)の標高312mの頂上からは、弓状に横たわる伊勢湾、伊勢平野のほゞ全域が眺望できるのである。

この地域には、多くの遺跡が分布し、古代中世には大きな勢力圏を形成していたと考えられる。小野遺跡（矢印）の西の丘陵端部には、全長74mの向山古墳（13）が所在し、粘土槨と考えられる主体部からは、鏡・石剣・車輪石などが出土し、最近国の史跡にも指定された。西山古墳（6）や筒野古墳(3)も向山古墳同様前方後方墳で、この地域に集中することが注目されている。また向山古墳の北隣の原田山古墳群やミツコベ古墳（7）なども前半期の古墳である。

後期古墳も点在しており、一の谷古墳（14）、前谷古墳（15）、阿坂古墳群（17）や向山古墳

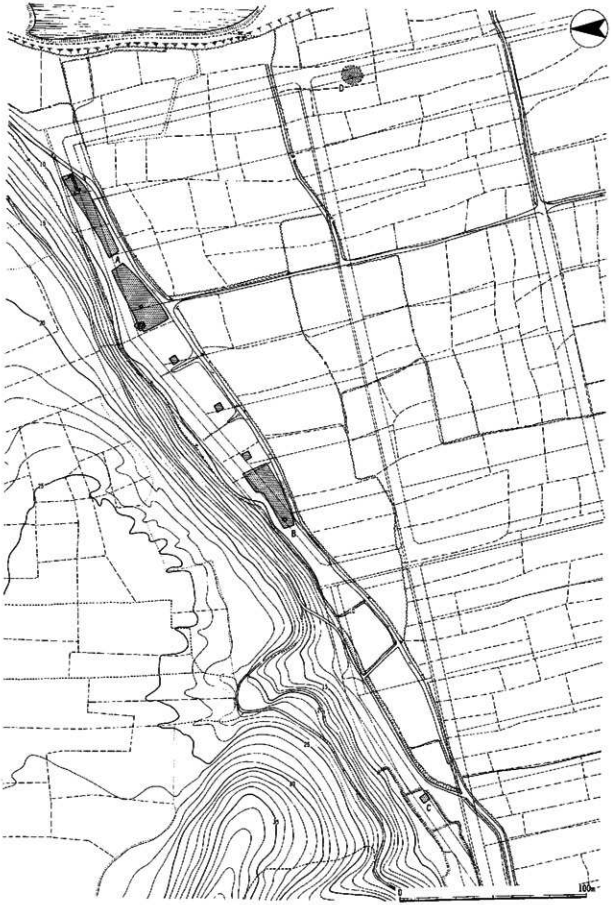
と同一丘陵の小野古墳群などがある。

分布密度の濃さは古墳だけに限らず、弥生時代の遺跡あるいは飛鳥奈良時代の寺院址にも言える。「三重考古図録」[2]によれば弥生前期の上器が国鉄名松線ごんげんまえ駅付近から発見されており、山神田遺跡（８）、嬉野遺跡（９）そして周辺には権現前西方遺跡（５）、下之庄遺跡（４）、新出遺跡（11）などが分布する。また近年の圃場整備事業に伴って、発掘調査の実施された中ノ庄遺跡（19）や上ノ庄遺跡（18）も近い。

寺院址として嬉野廃寺跡（10）、円光寺跡（12）、少し離れて天花寺廃寺跡（20）、伊勢寺跡などが知られる。中世の城跡も多く、前述の阿坂城をはじめ高城城（22）、枳城（23）、八田城（２）、釜生田城（１）、天花寺城（21）がある。こうした環境の中に小野遺跡が位置している。

地形的には、多くの遺跡が分布する通称嬉野台地と言われる標高20～30ｍの台地南裾の畑地にあたり、嬉野町との境が近い。畑地は南に向ってやゝ傾斜し、標高９～10ｍで、農道をへだてて水田となる。水田地帯には多くのため池が築かれ、また航空写真を見ると条里制遺構がうかがわれ、「大坪」などの地名が残っている。

小野遺跡航空写真（矢印右Ａ地区、左Ｂ地区）



発掘区域図（1：2,000）

Ⅲ 遺　　構

松阪市小野町から嬉野町算所に通じる農道に沿う台地南裾の東西に細長に畑地には、全面と言って良いほど広範囲に土器片が散布していた。試掘調査の結果、特に遺物の多く出土した地区についてのみ本調査を実施した。当初、A地区約750m²、B地区約430m²、C地区約270m²を発掘調査する計画であったが、C地区は農業基盤整備事業の計画再検討により、現状保存されることになり、今回の報告では試掘調査時の報告にとどめる。また工事施行中に石造物が出土した地点を一応D地区とする。

A地区

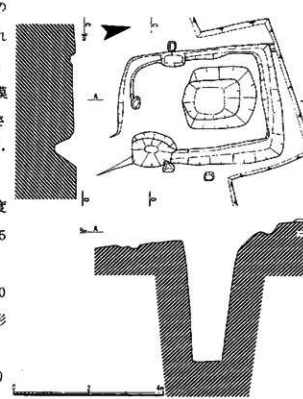
遺跡の立地が台地裾部にあり、黄褐色粘土層の地山は北から南に向って傾斜している。発掘区北端と南端では高さ約1.5mの比高があり、地山の上に重なる黒色土いわゆる黒ぼこの堆積も異なる。発掘区の南端では表土面から地山面までの深さは約1.8mあり、遺構は、黒色土層中に掘られている。土器類も表土から表土下1.0m程の深さまでに出土し、それより下層では遺物もほとんどなかった。そのため遺構の検出は不可能であった。ただ発掘区北端及び東端部のように黒色土の堆積が薄く、遺構が地山に及んでいる箇所では小穴等がわずかに発見され、また井戸は深く地山を掘っているため、A地区で2ケ所確認できた。

井戸1　発掘区北西隅で検出。3.1×4.3mの平面方形の竪穴の中央部やゝ北に寄って掘られたもの。掘り方の平面は、方形で四隅は丸く、上辺で1.7×2.0mを測る。約0.5m下でその規模は1.0×1.5mとなり、底部は0.7×0.8mと小さくなる。深さは、地山面から約3.4mで、木枠・曲物は発見されなかった。

覆屋と考えられる竪穴は、周囲に幅30cm程度の周溝がめぐり、東南隅に1.0×1.2m、深さ0.5mの土坑がある。

井戸及び竪穴からは比較的多量の土器等（70～93、153～155）が出土した。その土器類の形態から考えて、平安時代後葉のものである。

井戸2　井戸1の東10mにある円形の素堀りのもの。上辺の径は1.0m程度と小さい。完掘で



A地区井戸1実測図（1：100）

遺跡遠景（東から　矢印右A地区、左B地区）

遺跡遠景（南から　矢印A地区）

A地区　井戸1（北から）

B地区　井戸3（南から）

きなかったが、山茶椀（138）が出土し、鎌倉時代の遺構であろう。

その他　発掘区東部には、小穴や浅い土坑などが発見されたにとどまる。遺物はかなり多く出土した。奈良時代・平安時代中～後葉の土器が目立った。

B地区

A地区同様、黒色土の推積層が厚く、北端で1.0m、南端で2.0mにも及ぶ。遺物も、その黒色土層の中位に多く包含されており、遺構の検出はできなかった。遺物についてはA地区と類似するが、若干平安時代末葉・鎌倉時代のものに特徴がある。唯一の遺構として、井戸がある。

井戸3　鎌倉時代後葉のもので、山茶椀・鍋等（131～136）が出土した。平面は径が約1.5mの円形で、深さ約1.5mの地山面の底まで、発掘したが、あまり湧水もせず、地山もきれいなものであった。おそらくは、湧水しないため、途中で、掘削を止め、別の箇所に井戸を選んだのであろう。

C地区

試掘調査の2×2mのグリッド部分についての調査だけである。A・B地区同様、黒色土層の推積は厚く、遺構面は検出し得ない可能性が強い。当初本調査予定に含まれていたが、計画変更により現状保存されることになった。わずか4m²の発掘区であるが、面積に比して遺物は多く、特に古墳時代末あるいは飛鳥時代の須恵器（10、12）及び平安時代末葉の山茶椀（116～118、121～125）・鍋（130）などが目立つ。

D地区

石造物（157）が重機による排水路掘削中発見された。重機による掘削で、その出土状況は詳しくわからない。地山面も深く、地元ではその付近に沼地が以前あったと言っていることから、何らかの形で流れ込んだものであろう。他に遺物は見られなかった。

Ⅳ　遺　　物

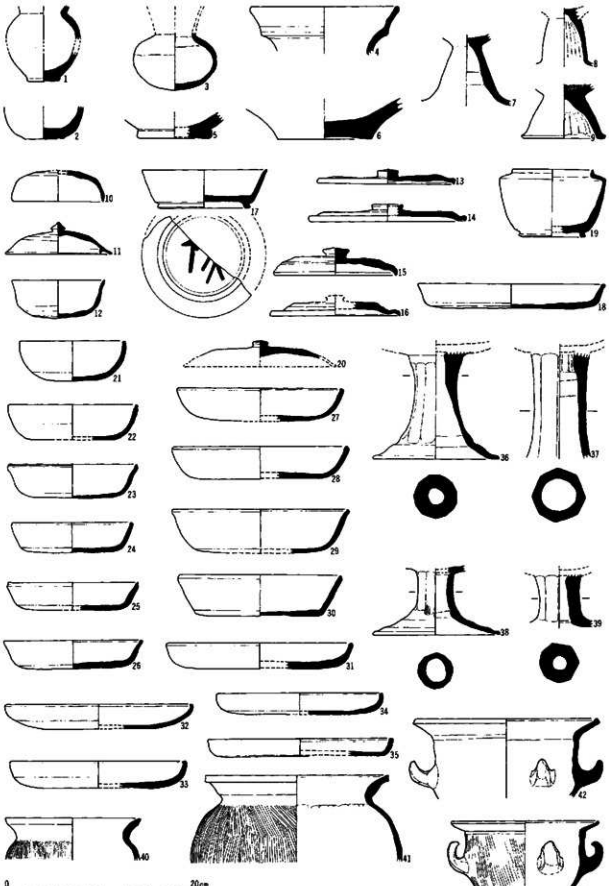
平箱30個程度の出土遺物がある。その大部分が土器類で、古墳時代前半期から鎌倉時代後半までの各時期各種の土器があり、中でも平安時代のものが最も多い。土器の他には、カマドの破片、土錘、瓦類、砥石、石造物などがある。

古墳時代前半の土器

量としては、非常に少ないが、A・B地区で出土している。

〈土師器〉

小形壺（1～3）　胴部の破片で、細長いものと扁平なものがある。いずれもミニチュアの土器で、底部は丸いものと平底のものとがある。内面には、指頭調整の痕が明瞭に残る。胎土にわずかに砂粒を含む。



土器実測図（1：4）

壺（4～6）　退化した二重口縁をなす口縁部の破片と底部の破片で、いずれも胎土に砂粒を含む。

高杯（7～8）　いずれも杯部を欠損する。筒部はゆるやかにふくらみ、裾部は大きく開く。

甕（9）　台部のみの破片で、胴部の底部内面には刷毛目が施される。

奈良時代の土器

A地区を中心として、比較的多く出土した。中には、古墳時代末あるいは飛鳥時代とした方が良い杯（10～12）なども含まれているが、ここでは一応奈良時代の項に含めて報告する。

〈須恵器〉

杯蓋A（10）　口径9.6cm、器高3.3cm。ゆるやかな丸味をもつ天井部は、ヘラ切り未調整で、口端部は丸くおさめている。

杯蓋B（11）　天井部はヘラ削りされ、中央部に宝珠つまみをもつ。口縁端部内面には返りが見られる。

杯身B（12）　高台を有しない小形の杯で底部はヘラ切り未調整である。

杯蓋C（13～14）　口径15.0cm以上の扁平なもので、天井部はヘラ削りがなされている。口縁端部は垂直もしくは内に曲ってまとめられている。

杯蓋D（15～16）　口径が14cm未満の小形のもので、器高も杯蓋Cに比べて高い。天井部のヘラ削りははっきりしない。

杯身C（17）　ふんばった高台がつけられた水平な底部と外反する口縁部からなる。底部外面には墨書がある。

皿（18）　口径20.2cm、器高2.7cmの扁平なもの。底部は雑なヘラ削りがなされている。

短頸壺（19）　肩が張り、稜線を呈する胴部と高0.5cmの短い口頸部からなる。底部にはふんばった低い高台がつく。口径8.7cm、器高7.2cm。

〈土師器〉

蓋（20）　天井部に径1.8cm、高0.6cmのつまみをもつ。明赤褐色を呈し風化が著しい。

杯A（21）　口径が小さく、深いもので、胎土には多くの砂粒を含む。色調もくすんだ黄褐色を呈している。なお時期的には少々遡るかもしれない。

杯B（22～26）　杯Aに比べて口径が大きく、浅い。口縁部は横なでされ、22を除いて、底部はヘラ削りされる。22は、胎土に多くの砂粒を含み、底部も未調整で、くすんだ褐色を呈する。

杯C（27～30）　さらに径が大きく、深い。赤褐色ないしは黄褐色を呈し、胎土の緻密なものが多い。27～28はヘラ削りが底部だけでなく口縁端部まで及んでいるが、29～30は、底部にのみ認められる。

皿（31～35）　口径に比して浅いものを皿とした。胎土も緻密で硬質である。底部はヘラ削り

古墳時代前半土器・奈良時代土器

されているものと未調整のものとがある。内面の暗文等は明らかでない。

高杯（36～37）　脚部の破片のみで、杯部は明らでない。脚部はいずれも面取りされるが、脚部の長短は各種みられる。

甕A（40）　小形の甕で、胴部には縦に刷毛目が施される。

甕B（41）　や、肩の張る胴部と外反する口縁部からなる。口縁部は肥厚し、胴部には刷毛目が施される。接合部の内面は、指頭により調整された痕が残る。

甕C（42～43）　把手のつく甕で、外反する口縁部で上につまみ出されている。胎土は緻密なもので色調が赤褐色を呈する。43の胴部の一部には刷毛目が見られる。

平安時代中葉の土器

量的にはさほど多くないが、糸切り底の須恵器杯身をはじめ、この時期のものが見られる。土器の形式分類にあたっては、他の時期のものとの混乱を避けるためE～Gを便宜上用いる。

〈須恵器〉

杯蓋E（48～49）　48は口径18.4cm。49は口径14.5cmと小形である。いずれも深く、天井部はていねいにヘラ削りされる。口縁端部は、折り返された格好で、断面内側に曲る。

杯身E（47）　口径13.6cm、器高3.8cm。底部には、広い高台がかなり中心に寄ってつけられる。

杯身F（44～45）　44は口径13.0cm、器高3.9cm。共に一般的な須恵器のような灰色でなく、赤赤褐色がかった色調を呈し、全体によく水びきされ、底部には糸切りの痕が残る。

杯身G（46）　杯身F同様赤褐色がかった色調を呈する。口縁部と底部の境は稜をなし、底部はヘラ削り調整される。

鉢（50）　平らな底部と垂直近い口縁部からなり一応鉢とする。口縁部は水びきされ、口縁端部は内側に肥厚する。全体に焼きぶくれが目立ち、形もいびつである。

壺（51～52）　51は、口径16.8cmで、肩の張る胴部と短く外反する口縁部からなる。生焼なのかや、白っぽい灰色を呈する。52は、短い口頸がほゞ垂直にのび、端部でわずかに外反し、口径15.8cmを測る。肩部には、耳が四方向につけられていたらしくはがれた痕が残る。胴部内外面には叩き目が見られる。

甕（53）　外表には、平行の叩き目が残る、胴部下半から底部にかけての破片であり、底部の接合の様相がよくわかる。赤褐色を呈する。

〈土師器〉

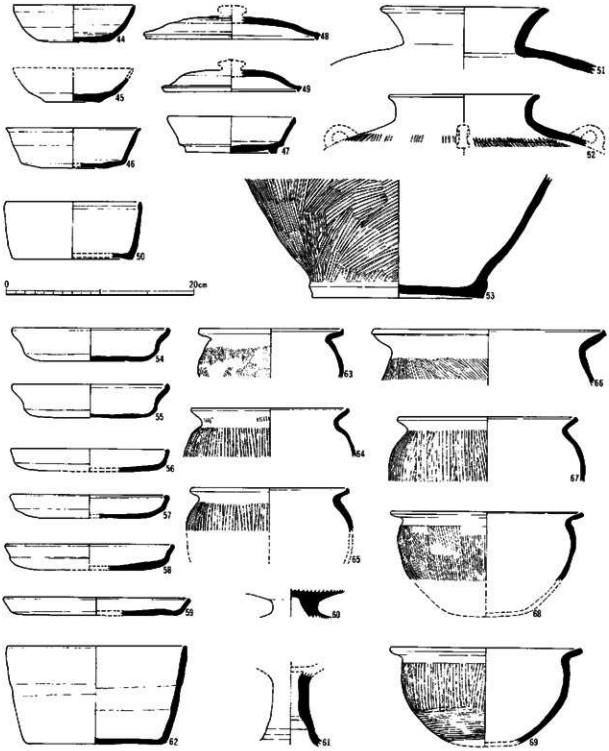
杯E（54～55）　外反する口縁部が屈曲し、口縁端部は巻き込むかのように肥厚する形態をもつ。口縁部は横なでされ、底部は未調整で指によるおさえの凹凸が目立つ。

皿（56～59）　口径が18cm未満のもの（56～58）と20cmにも及ぶものとがある。ほゞ平坦な底部はヘラ削りが施されず未調整で、凹凸が激しい。短い口縁部は、わずかに外反し横なでされる。

高杯（60～61）　筒部が短く、裾部が大きく開くものと、筒部の細長いものがある。いずれも面取りはない。胎土は金砂を含んで緻密である。

鉢（62）　平底とあまり外傾せず直線的にのびる口縁部からなり、須恵器鉢とよく類似した形態を呈するが、須恵器鉢より深い。口径19.2cm、器高10.5cm。胎土は緻密で黄褐色の色調をもつ。

甕E（63～65、67）　短い口縁部が外反し、口縁部が上方につまみ出される。球形に近い胴部には、指頭によるおさえが目立ち、粗い刷毛目が施される。



土器実測図（1：4）

甕F（66）　破片であるが、胴部の肩は張らず、長い胴部をもつものであろう。口縁部は、やゝ肥厚し端部は上方にひき出される。

甕G（68～69）　半球状の胴部と短い口縁部からなる。甕と言うより鍋と言えよう。なお破片であり、把手の有無については不明である。

平安時代後葉の土器

本遺跡出土の土器類の中で、最も量が多い。特にA地区井戸1からは、かなりまとまって出土した。土師器の他に灰釉陶器も若干確認でき一応この時期として報告する。なお、土器形式分類については、H～Kを用いるが、便宜上のことである。

〈灰釉陶器〉

椀（94～95、97） 破片が多い。全体の器形のわかるものは94のみであり、口径16.2cm、器高5.0cmを測る。施釉の範囲及び方法は、釉が風化しているため明らかでない。腰部から底部にかけてはヘラ削りが認められる。95、97は底部の破片であるが、97には底部に「×」が印されている。

皿（70、96） 70は底部内外面を除いて、淡灰緑色の釉が施されたもので、内面には重ね焼きの痕が明瞭に残る。口径15.2cm、器高3.3cmで、底部はヘラ削りの後高台をつけている。口縁部はまっすぐ外方にひき出され、端部がわずかに立つ。96は、底部のみの破片であるが、内面に雑な花文が刻まれる。

長頸瓶（98～99） いずれも口頸部の破片のみで全体の形態は明らかでない。時期的には、少々遡る可能性もある。98は細く長い。内面には水びきの痕が明瞭に残る。99は98に比べて太く短いようである。

〈土師器〉

杯H（71～74、100～101） 大きさはさまざまであるが、底部断面が比較的丸味をもつ。口縁部は横なでされるが、底部は未調整のまゝで、指頭の凹凸が目立つ。淡い赤褐色の色調を呈し、胎土は良質で器壁はうすい。

杯I（75～76、102） 底部が平坦で、口縁部は横なでが強く段をもって外反する。器壁がうすく、淡い褐色を呈するものが多い。底部は杯H同様未調整で指によるおさえの痕が残る。

杯J（77～81、104～106） 杯Hを杯Iの中間の形態を有し、手法等は杯H・Iと同様である。

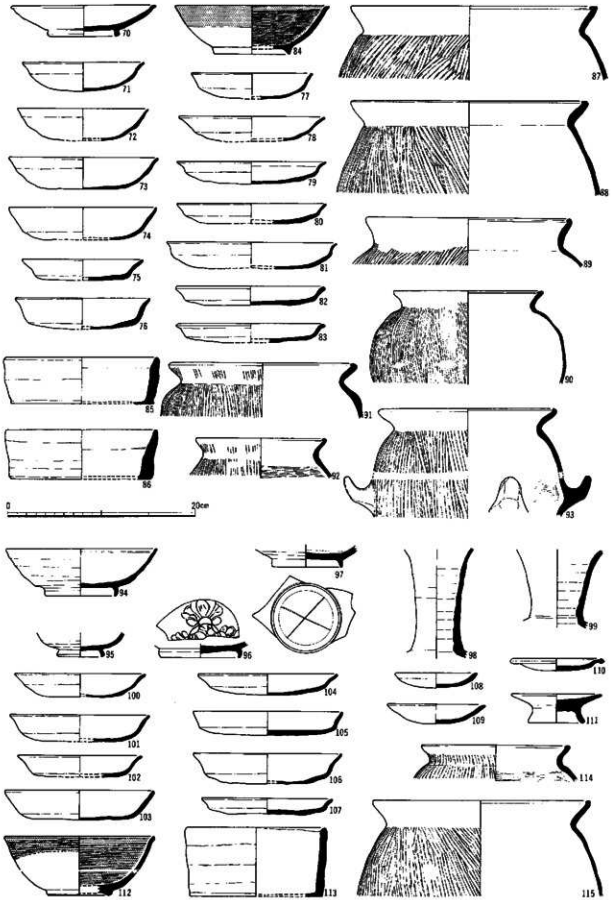
杯K（103） 手法等は他のものと同様であるが、ただ口縁部がやゝ厚く横なでによる段をもたない。色調も乳白色に近い褐色を呈する。

皿（82～83、107） 器高が2.0cm未満の扁平なもので、平らな底部からのびる口縁部はやゝ肥厚する。手法等は杯と同様である。

小皿H（108～109） 108は口径8.9cm、器高1.6cm、109は口径10.7cm、器高2.0cmで、口縁部は底部からゆるやかにのび、108の口縁端部は横なでされている。

小皿I（110） 口縁部が外反するとともに、内面に巻き込んでいる。落し蓋に似た形態を呈する。伊勢地方ではあまり類例を見ない。口径9.6cm、器高1.3cm

小皿J（111） 小皿Aに断面がハの字状に開く高さ0.9cmの高台がつく。口縁部は、直線的にのび、口径9.4cmを測る。器高3.0cm。


70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
0
20cm

土器実測図（1：4）

平安時代中・後葉土器

椀（84、112）　いずれも低い高台を有する黒色土器で、内面及び外面の一部は、ていねいにヘラ研磨される。完形品はない。

鉢（85～86、113）　平らでうすい底部とほゞ直立する口縁部からなる扁平なもの、胎土には多く砂粒を含み、整形も雑で輪づみの痕のわかるものもある。

甕H（92、114）　小形の甕で、さほど外反しない口縁部の端部は内側に曲げられるのが特徴である。頸部から胴にかけては粗い縦方向の刷毛目が施される。胎土には多く砂粒を含み、くすんだ褐色を呈する。

甕I（89～91）　甕Hと手法等と同じだが甕Hに比べ大きい。胴部は肩が張る。90は、他に比べ器壁がうすく、刷毛目もやゝ細かい。

甕J（87～88、115）　甕H・Iと同様の手法で作られた大形の甕で、完形品はないが胴部は細長いものであろう。

甕K（93）　把手がつくと考えられるもので、手法等の様相は他の甕と同じである。

平安時代末葉の土器

B地区・C地区から少量出土した。器種も少なく山茶椀・土師器小皿・杯・鍋がある。

山茶椀（116～125）　ていねいなつくりのもので、口縁端部に輪花をつけたもの。灰釉をつけがけしたものなどがある。

土師器杯（129）　口径14.4cm、器高2.1cmの扁平なもの。厚い口縁端部を横なでし、底部は未調整のまゝで、口縁部と底部の境には稜線が見られる。

土師器小皿（126～128）　杯を小形化した形態をもつもの（126～127）と、底部に糸切り痕のよく残るもの（128）とがある。

土師器鍋（130）　口縁端部を内面に折り返した特徴がある。胴部は下半部を欠損するが球形のものと思われる。外面に刷毛目などは施されない。

鎌倉時代後葉の土器

量としては少ないが、B地区出土の方が多く、井戸3からはまとまって発見された。器種には山茶椀・山皿・土師器小皿・杯・鍋の他に磁器類もわずかに見られる。

山茶椀（131～134、137～138）　径の小さな底部とほゞ直線的にひき出される口縁部からなる。底部には低い高台が貼りつけられ、その調整は雑で高台にモミ痕の残るものもある。胎土には砂粒を多く含む。口径14.6～16.0cm、器高4.9～5.4cm。131及び132は底部に墨書がある。

鉢（139）　高台のついた底部の破片で、おそらくは片口鉢であろう。胎土には砂粒を多く含む。

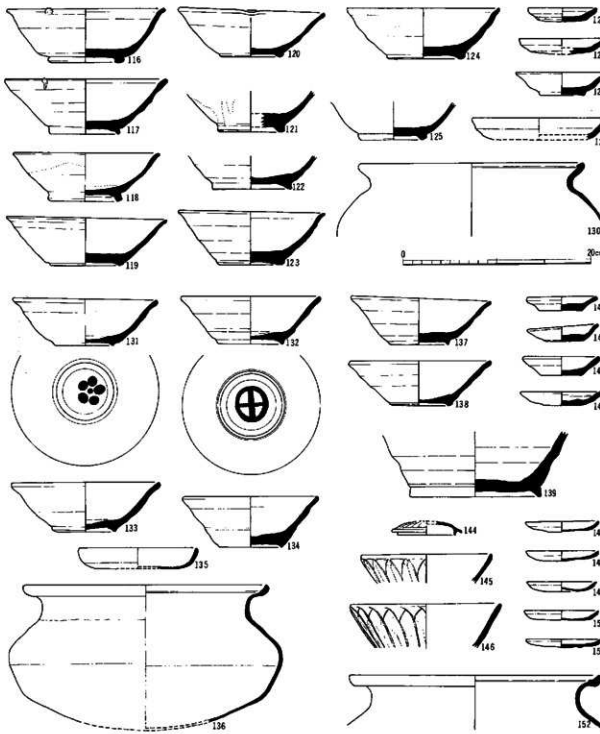
山皿（140～143）　扁平なもので、径の大きな底部と短い口縁部からなる。底部に糸切り痕が残り、内面には自然釉のかかったものもある。

土師器杯（135）　口縁部の器壁が底部の器壁よりも厚く、口縁部は横なでされているが底部は

未調整のまゝである。白黄色の色調を呈する。

土師器小皿（147～151）　口径が8.0cm前後、器高1.0cm前後の扁平な、手づくねのもので、不整形である。口縁端部は横なで内面はなで調整されるが、底部は未調整のまゝで、指頭の凹凸が目立つ。色調は淡い褐色を呈する。

土師器鍋（136、152）　口縁端部を内面に折り返し、横なでしたもので、胴部は扁平でやゝ浅

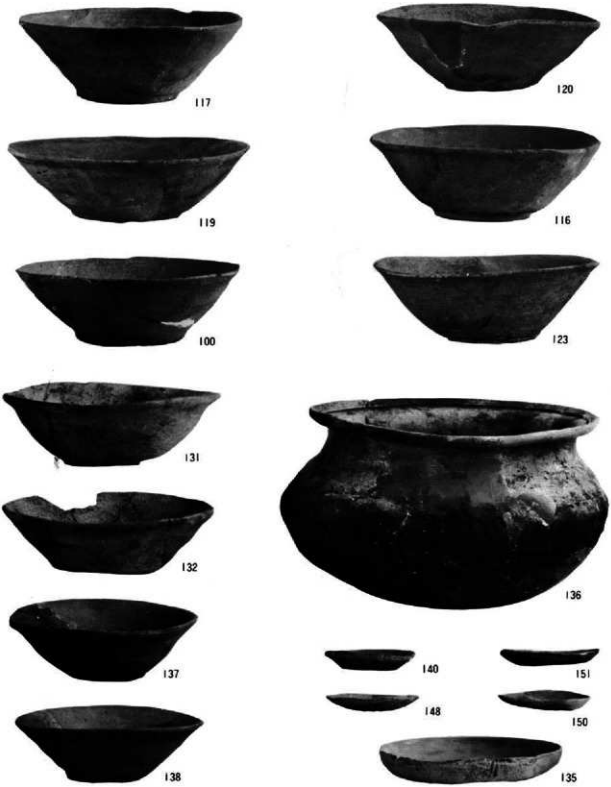


土器実測図（1：4）

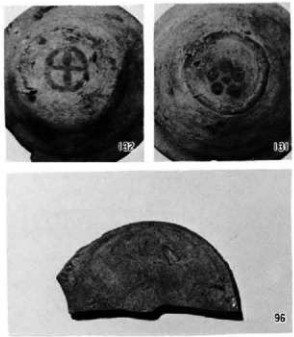
いものとなっている。136の胴部下半にはヘラ削りがなされ、外表には煤が付着している。

白磁合子蓋（144）　小壺形の合子の蓋で、天井部には、蓮弁がある。

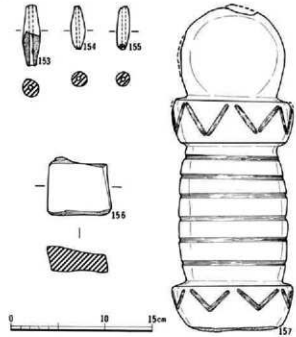
青磁碗（145～146）　破片で、形態の復原できるものは少ない。外表には弁幅が広く弁中央の



平安時代末葉土器・鎌倉時代後葉土器



墨書、陰刻土器



その他の遺物実測図（1：4）

盛りあがった蓮弁が施されるものが多い。

その他の遺物

土器類の他には、カマド片、瓦類、砥石片、土錘、石造物片がある。

カマド　2点あるがいずれも廂部の破片のみで、廂の部分はなでられている。体部及び内面には刷毛が施される。

瓦類　丸瓦・平瓦があるが、軒丸瓦・軒平瓦は見られない。内面には布目痕がよく残るが、外表の叩き目は消されているものが多い。

砥石（156）　断面が扁平で、細長いもの。よく使われており、四面とも磨かれ、中には凹む面もある。石英斑岩製。

土錘（153～155）　A地区井戸1から出土した。細長い小形のもので、中央部がふくらむ。

石造物（157）　粗粒砂岩製で風化著しい。D地区から工事中に掘り出されたもの。宝篋印塔の先端と思われるが、請花等は、簡略化されている。

石造物

V　結　　語

小野遺跡の所在する地に人々は住み生産活動を行ない、多くの遺物を残した。それは断続的であるが、古墳時代の前半から鎌倉時代に及ぶ。しかしながら生活の跡としての遺構は検出が困難

で集落址の実態はつかめなかった。

出土した遺物で、量的に多いのは、奈良時代と平安時代中～後葉の土器である。奈良時代の土器として報告した中には、それ以前に遡ると思われるものが若干あるが、それらを除くと須恵器杯蓋は内面に返りを有しない扁平なもので、天井部につけられたつまみも宝珠形を呈しない。土師器の方が須恵器より器種・量ともに多く、土師器杯は一般的に外傾度が著しい。暗文・ヘラみがきは土器の保存状態にもよるが一例も認められなかった。土器の調整手法については、底部ヘラ削り、口縁部横なでのものが多いが、口縁端部までヘラ削りをするいわゆる平城宮跡で言うC手法[3]もあり、奈良時代も後半に位置づくのではないだろうか。

平安時代中～後葉とした土器は、その分類にいささか疑問が残るが、底部に糸切り痕の残る須恵器杯は、形態等の上から黒笹78号窯式に比定され、名古屋市鳴海町ＮＫＩ34号古窯跡[5]出土のものにも見られ、10世紀前半のものと言えよう。また土師器杯Ｅは、形態、調整手法ともカリコ遺跡出土杯Ａ[6]に類似し、「斎王宮跡発掘調査報告Ｉ」[7]によればカリコ遺跡出土の土器は平安時代前半に位置づけられる。当遺跡出土のこの一群の甕などには新しい要素が考えられ、斎王宮跡ＤＴＳＫ57や高向遺跡[8]出土のものまで下がらないとしても、カリコ遺跡より一時期新しい気がする。

Ａ地区井戸１の出土土器をはじめ、平安時代後葉として報告したものが多い。灰釉陶器には雑であるが除刻花文の施されたものも見られ、また土師器杯・皿は器壁が薄く、白っぽい赤褐色を呈する。甕は、口縁端部が内側に曲げられたもので、胎土に多くの砂粒を含む平底の鉢も目立つ。こうした土器は、報告によって平安時代中葉あるいは後葉と微妙であるが、前述の斎王宮跡、高向遺跡、平生遺跡、迫間浦遺瀬遺跡等に出土例があり、斎王宮跡ＤＴＳＫ57では、10世紀末～11世紀前半にその時期が考えられている。当遺跡もその頃のものと思われるが、ただ土師器杯皿の様相や甕の口縁端部の内側への折り返しが、平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけてあらわれる鍋類（県内にはかなり出土例がある。たとえば当遺跡で言う130の土器）の口縁端部の折り返しの様相にスムーズにつながることなどから考えて斎王宮跡ＤＴＳＫ57のものよりやゝ新しいのであろう。

（吉村利男）

〈注〉

①後藤守一「伊勢一志郡豊地村の二古式墳」『考古学雑誌』14－3　1923年
②三重県教育委員会「三重考古図録」1954年
③奈良国立文化財研究所「平城宮跡発掘調査報告Ⅳ」1965年
④橋本彰一「三彩緑釉灰釉」『陶磁大系』5　平凡社　1973年
⑤小島一夫・井上光夫「ＮＫＩ34号古窯跡発掘調査報告」名古屋市教育委員会　1975年
⑥世古且守・山沢義貴「カリコ古墳・カリコ遺跡発掘調査報告」玉城町教育委員会　1972年
⑦谷本鋭次「斎王宮跡発掘調査報告Ｉ」三重県教育委員会　1974年
⑧小玉道明・山本威・青木康夫・伊藤久剛「南勢バイパス埋蔵文化財調査報告」三重県教育委員会　1973年
⑨吉村利男・芦部公一他「平生遺跡発掘調査報告」平生遺跡調査団　1976年
⑩南山大学人類学科考古学研究室「迫間浦遺瀬遺跡」南勢町教育委員会　1976年

昭和51（1976）年3月に刊行されたものをもとに
平成16（2004）11月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告32

昭和50年度農業基盤整備地域

埋蔵文化財発掘調査報告

1976年3月31日
編集　三重県教育委員会
発行　三重県教育委員会
印刷　オリエンタル印刷株式会社